

発掘調査の概要

甘樫丘東麓遺跡の調査(飛鳥藤原第146次)

「ガチッ」。調査を開始して4ヶ月を過ぎ、記者発表を10日後に控えた寒い日でした。柱穴の検出も一段落し、調査区の一部を掘り下げて下層の調査を開始した矢先。スコップの先に大きな石が当たりました。石は一つではありません。上下に何段も重なり、南北方向に連なっていきます。調査員の間、驚きと期待が広がりました。甘樫丘の石垣が、1300年以上の長い眠りから目を覚ました瞬間でした。

甘樫丘は、飛鳥を一望する丘陵で、現在は国営飛鳥歴史公園甘樫丘地区として整備されています。丘の東麓に位置する約6000㎡の谷地では、これまでの調査で、7世紀中頃の焼土層と炭化した木材や焼けた壁土などの遺物、7世紀代の建物跡と大規模な整地を確認しており、乙巳の変(大化の改新)で滅びた蘇我邸との関係が注目されていました。

そこで、2006年10月から谷の東奥を発掘調査し、7世紀代の大規模な整地と建物群を確認しました。遺構の時期は大きく3時期に分かれます。もともと、調査区内の自然地形は、中央に谷筋が南北に入り、東と西が高い傾斜地となっていました。

7世紀の前半には、谷筋の東半を埋め立てて石垣を築き、東側に一段高い平坦面を造成しました。石垣上の敷地には、建物や塀を建てています。石垣は、裏込めの石などを入れずに積み上げた、古墳の石積などと共通する技法で築かれています。

7世紀の中頃には、敷地の段差と石垣を覆うように土を盛り、谷筋を完全に埋め立てて平坦地をつくりました。この平坦地には建物や塀が建てられます。



調査区全景(南から 中央に石垣がみえる)

特に注目されるのが、2棟の総柱建物です。これらは、倉庫や高床建物と思われます。『日本書紀』には蘇我邸に武器庫があったという記述がありますが、残念ながら調査区内では、用途を特定できるような遺物は出土しませんでした。また、調査区の東側では、2段の難段状に広がる石敷も確認しました。

7世紀末の藤原宮の時代には、再び整地をおこないました。L字形に溝を掘り、東外側の山側には炉を設けます。炉は4基を確認しました。隅丸長方形の炉には、炉の内部に空気を送り込むための送風口が残っていました。

このように7世紀の土地利用が明らかになってきましたが、7世紀前半と中頃の2度にわたる大規模な整地作業は特に注目されます。整地には多大な労力が必要で、いずれかの整地が蘇我邸の造成にともなう可能性も考えられます。ただし、他の有力者や組織による造成の可能性も否定できません。

ただし、敷地造成のダイナミックさと比べ、今回検出した建物遺構はいずれも中小規模でした。敷地の中核となる建物は、これまでの調査区外に展開しているものと思われます。また、谷の裾野の調査時に出土した、焼けた壁土に関わる焼失建物も、今回の調査範囲では確認されませんでした。今後も継続して調査をおこない、遺跡の全容を明らかにする必要がありますでしょう。

今回の調査成果は、新聞やテレビなどでも大きく取り上げられました。2月11日の現地見学会には全国から5000人を超える見学者が訪れ、多くの感動の声をいただきました。地元の皆様、関係諸機関の皆様のご協力にも感謝いたします。

(都城発掘調査部 西田 紀子)



藤原宮期の炉(南から 手前が送風口)